

じっきょう

地歴・公民科 資料 No. 92

もくじ	
巻頭	SDGs（持続可能な開発目標）学習の進め方 —世界を「変革」する教育とは？／田中 治彦……1
特集	新教育課程にむけて 教科書執筆にあたって……7 地理総合／吉田圭一郎 詳述歴史総合／木畑 洋一 歴史総合／成田 龍一 詳述公共／柘植 尚則 公共／高橋 朝子
トピックス	『地理総合』開始に向けた高校授業における GISの活用方法の提案 / 根元 裕樹……12 ペリー来航を捉え直す授業—新科目「歴史総合」の 授業開発のヒントを探す / 内田 圭亮……16 BLMの世界的拡大から「差別」について考える ／佐藤 幸夫……20
図書紹介	……24

巻頭

SDGs（持続可能な開発目標）学習の進め方

—世界を「変革」する教育とは？

上智大学 名誉教授
田中 治彦

1. SDGs 学習の意義と課題

持続可能な開発目標（SDGs：Sustainable Development Goals）は2015年9月にニューヨーク国連本部で開かれた「国連持続可能な開発サミット」において採択された国際的な開発目標であり、2016～30年をその実施期間としている。2020年代の教育の基本方針を示した新学習指導要領では、教育の目的は「持続可能な社会の創り手」を育てることであることが明記された。さらに、菅首相は昨年11月の所信表明で2050年までの脱炭素化社会の実現を目指すとして述べている。今後数十年にわたって教育界のみならず日本社会全体が（あるいは世界全体が）持続可能な社会づくりに向けて動くことが予想される。コロナ後の最大の目標はSDGsの実現ということになるであろう。

それではSDGs学習はどのように展開されるであろうか。おそらく最初はSDGsの17目標の理解から入るであろう。17目標を教師が解説したり、生徒が任意の目標について調べ学習を行って発表する、というような展開である。それ自体は必要なことでもあり、一度は通らなければならない道でもある。しかし、それだけで「持続可能な社会の創り手」は育つであろうか。

本稿では、知識中心のSDGs学習から次のステップに移行するために重要なこととして、次の3点について述べておきたい。第一は、SDGsを17目標の表面的な知識理解ではなく、それらの目標に至った歴史的な経緯と理念について十分理解しておくことである。第二に、17目標の知識学習を発展させる方策として、参加体験型の学習、カリキュラム・マネジメント、社会に開かれたカ

リキュラムが必要であることである。第三に、教師の教育観の転換である。SDGs 学習に当っては、教師はティーチャー（教授者）としての役割だけでなく、ファシリテーター（促進者）や学びのプロデューサー（企画者）としての役割が求められる。

2. SDGs の歴史的背景

SDGs には、リオ・サミット以来の「持続可能な開発 (SD)」を引き継ぐ環境系の目標群と、「ミレニアム開発目標 (MDGs)」を引き継ぐ開発系の目標群との 2 つの柱から成っている。SDGs を支えるこれら 2 つの柱から見ていこう。

1) 地球サミットと「持続可能な開発」

持続可能な開発の概念は、1987 年にブルントラント委員会より出された報告書『我々の共通の未来』で提起された。このなかで、持続可能な開発は「将来の世代が自らのニーズを充足する能力を損なうことなく、現在の世代のニーズを満たすような発展」と定義された。これはそれまでのように開発と環境を対立的に捉えるのではなく、地球の生態系が持続する範囲内で開発を進める考え方である。現在の世代が将来の世代のための資源を枯渇させぬこと（世代間の公正＝環境問題）と、南北間の資源利用の格差すなわち貧困と貧富の格差を解消すること（世代内の公正＝開発問題）を目指している。1992 年にブラジルのリオデジャネイロで開かれた国連環境開発会議（地球サミット）において、持続可能な開発の理念が国際的に共有されて、具体的な行動計画として「アジェンダ 21」が採択された。

地球サミットでは、「気候変動枠組条約」が採択されて、地球温暖化問題解決への第一歩が踏み出された。また、「生物多様性条約」も採択されて、野生生物の減少や絶滅を食い止めるための国際的な枠組みが作られた。さらに、主に熱帯林の保護するための「森林原則」が声明の形で採択された。これらの条約や原則は SDGs の目標 13～15（気候変動、海の豊かさ、陸の豊かさ）に引き継がれることになる。

2) ミレニアム開発目標 (MDGs) の成果と課題

2000 年 9 月にニューヨークで開催された国連ミレニアム・サミットにおいては、21 世紀における国際社会の目標として国連ミレニアム宣言が採択された。1990 年代の環境、人権、貧困、ジェンダーなど国際会議で議論された開発目標と行動計画を統合して、ひとつの共通の枠組みとしてミレニアム開発目標 (MDGs: Millennium Development Goals) が提示された。MDGs は以下のような 8 つの目標から成る。

(1) 極度の貧困と飢餓の撲滅、(2) 普遍的初等教育の達成、(3) ジェンダーの平等の推進と女性の地位向上、(4) 乳幼児の死亡率の削減、(5) 妊産婦の健康の改善、(6) HIV/エイズ、マラリア、その他の疾病の蔓延の防止、(7) 環境の持続可能性の確保、(8) 開発のためのグローバル・パートナーシップ。MDG 6 に疾病の蔓延の防止があり、コロナ禍が予想されていたことが注目される。MDGs は主に開発途上国を対象とした目標であったため、日本においては国際協力、開発教育関係者を除いてあまり注目されることはなかった。これらの目標は SDG 1～6 に引き継がれている。

当時の潘基文^{パンギムン}国連事務総長は MDGs を「歴史上最も成功した貧困撲滅運動」と評価している。しかしながら、いくつか課題が残された。確かに貧困人口は大幅に減ったが、今なお約 8 億の人が極度の貧困状態にある。また、貧困層と富裕層との格差が世界的に大きく開いた。女子の教育機会が改善されたが、男女間の不平等は依然として深刻である。世界を見ても女性の国会議員は 2 割しかない。ちなみに、日本では 1 割以下である。地球温暖化と環境悪化については今後も多大な努力が必要である。戦争や紛争により、毎日 4 万 2 千人が難民となっている。MDGs で残されたさまざまな課題を解決するために、2015 年に新たに SDGs が設定されて、2030 年までの解決が目指されることになったのである。

3. SDGs の目標と理念

SDGs は 2015 年 9 月 25 日の国連総会で採択さ

れた文書『我々の世界を変革する：持続可能な開発のための2030アジェンダ』によって提唱された。最初に、「人間の尊厳と平等」「地球環境の持続可能性」「豊かな生活の確保」「平和で公正で包摂的な社会」などの原則が示されている。SDGsの17目標の背景にある理念や原理が書かれており、また数値目標になりにくい平和や文化などの価値も強調されているので、SDGs理解にはまずこの文書を読むことから始めてほしい。文書のタイトルが世界を「改善する」ではなく「変革する(transform)」となっていることの意味も考えたい。

1) SDGsの17目標

SDGsの17目標は大きく5つのグループに分類できる。まず、SDG1～6はMDGsを引き継ぐ**開発系の目標**であり、主に開発途上国を対象としたものである(SDG1 貧困をなくそう、SDG2 飢餓をゼロに、SDG3 すべての人に保健と福祉を、SDG4 質の高い教育をみんなに、SDG6 安全な水とトイレを世界中に)。

SDG7～9が**経済産業系の目標**である。SDG7 エネルギーをみんなに、そしてクリーンに、SDG8 働きがいも経済成長も、SDG9 産業と技術革新の基盤をつくろう、である。さらに、SDG11 住み続けられるまちづくりを、SDG12 つくる責任つかう責任、は**社会生活系の目標**である。

SDG13 気候変動に具体的な対策を、SDG14 海の豊かさを守ろう、SDG15 陸の豊かさを守ろう、の3目標は地球サミット以来の**環境系の目標**である。また、**理念系の目標**がある。それは、SDG5 ジェンダー平等を実現しよう、SDG10 人や国の不平等をなくそう、SDG16 平和と公正をすべての人に、である。最後の「SDG17 パートナリシップで目標を達成しよう」は、以上16の目標を達成するための実施体制づくりに関する目標である。

このようにSDGsは、貧困や保健医療、教育などのMDGsの開発目標と、地球サミット以来の持続可能な開発に関する世界共通の目標の双方の柱から成っている。そのため、SDGsは先進国に

も途上国にも共通のユニバーサルな開発目標であることが特徴である。

2) SDGsの理念

SDGsを学習する上で17の目標それぞれについて知ることは大切なことではあるが、その背景にある基本理念を理解することの方がより重要である。17目標を暗記することよりも、以下の3つの理念について正確に理解しておくことが、SDGsの本質的な理解により近づくし、また将来的な応用にも役立つ。それらは「公正」「共生(包摂)」「循環」である。

①公正(equity)

「公正」という理念が強調されるようになったのは1992年の地球サミット以来である。「持続可能な開発」において「世代間の公正」と「世代内の公正」という2つの公正が大切であるということはすでに説明した。それまでは「平等(equality)」という考え方が主流であった。公正と平等はどう違うのであろうか。例えば、地球温暖化問題においてすべての国がその人口比で「平等」にCO₂を削減することにしたら、発展途上国側から猛烈な反対意見が出るであろう。なぜならば、先進工業国は先に経済発展をしてCO₂を大量に排出して、現在の豊かな生活を享受しているからである。途上国にしてみれば、国内に深刻な貧困を抱えている上に、CO₂対策までさせられて経済発展を阻害されるのは「公正」ではないと主張するであろう。2016年には先進国も途上国もすべての国が参加した上で地球温暖化対策を行うための「パリ協定」が策定された。その際強調されたのが「共通だが差違のある責任」という公正の原則に基づいた温暖化対策のあり方であった。

②共生・包摂(inclusion)

SDGsの概念で共生と並んで重要なのが「共生・包摂」である。包摂は英語のinclusionの訳ではあるが、私たちの日常用語ではない。包摂の対語は「排除(exclusion)」であるので、包摂よりも「共生」と訳した方が適切であることが多い。SDGsのスローガンは「誰一人取り残さない(No one is left behind!)」である。この場合、取り残

されがちな人々として例示されているのが「女性、子ども、障害者、高齢者、移民・難民、先住民族」などである。共生・包摂は、SDGsを国や地域レベルで具体化する際に、最初に考慮すべき考え方である。

③循環 (circulation)

環境破壊の原因は自然の循環を人間が切断してしまったことにある。プラスチックごみがなぜ問題になっているかという、それが極めて分解されにくく、そのままの状態でも長年海中に漂ってしまうからである。地球温暖化の原因となっているCO₂は、石油や石炭などの化石燃料を大量に燃やし続けたために増加した。そもそも化石燃料は生物の死骸が数億年も海底に堆積して生成されたものである。それを短期間に大量に空中に放出してしまった。本来であれば、植物がCO₂を酸素に還元してくれるので、自然の循環が成り立つはずなのであるが、熱帯林などの大量伐採で酸素への還元が追いつかず、空気中のCO₂濃度が上昇し続けているのである。

SDGsの理念をより深く理解するためには**参考文献1**を参照されたい。

4. SDGs 学習の課題

1) SDGs における教育目標

SDGs の中では教育は4番目の目標である。SDG 4は「すべての人々に包摂的かつ公平で質の高い教育を提供し、生涯学習の機会を促進する」となっていて、さらに7つのターゲットが示されている。この中で、日本の教育にもっとも関係が深いのがSDG 4.7である。「2030年までに、持続可能な開発のための教育及び持続可能なライフスタイル、人権、男女の平等、平和及び非暴力的文化の推進、グローバル・シチズンシップ、文化多様性と文化の持続可能な開発への貢献の理解の教育を通して、全ての学習者が、持続可能な開発を促進するために必要な知識及び技能を習得できるようにする」と述べられている。すなわち、ESD(持続可能な開発のための教育)、ジェンダー教育、平和教育、グローバル市民教育、多文化教

育を2030年までに推進することが求められている。

これを受けて、文部科学省は2020年度から実施される学習指導要領の前文で、これからの教育の目的を次のように説明している。「これからの学校には、こうした教育の目的及び目標の達成を目指しつつ、一人一人の児童が、自分のよさや可能性を認識するとともに、あらゆる他者を価値のある存在として尊重し、多様な人々と協働しながら様々な社会的変化を乗り越え、豊かな人生を切り拓き、持続可能な社会の創り手となることができるようにすることが求められる。」(下線筆者)

文中にある「こうした教育の目的及び目標」とは1947年制定の教育基本法に示された「平和で民主的な国家及び社会の形成者」のことである。学習指導要領において、育てるべき人間像が示されたのは実に70年ぶりのことである。2020年代の教育の目的が「持続可能な社会の創り手」を育てることであると明記されたことにより、SDGsを含む教育内容が新しい時代の学習において最重要項目となったといっても過言ではない。

2) カリキュラム観の転換

それではESDを実践するに当たってはどのような学習が行われるのであろうか。SDGsのように複雑で広範な地球的課題を理解し、自分たちの問題としてつなげていくことは決してやさしいことではない。学習方法の観点からみるとき、ESDの内容である地球的課題の学習にはいくつかの特徴がある。それは、①問題解決的であり、②未来志向であり、③知識の獲得だけでなく態度の変容が求められていることである。地球温暖化のように課題に対する回答が複数あり、しかも正解は未来にしかわからない、というような問題を学ぶためには、従来のような知識伝達型の教育では不可能である。

従来の教育は図1のような学習過程を想定してきた。教員が学習の目的を設定して授業計画を作る。学習者はそれを受動的に学んで、当初の学習目標をどこまで達成したかによって評価される、という図式である。そして学習の目的や内容につ

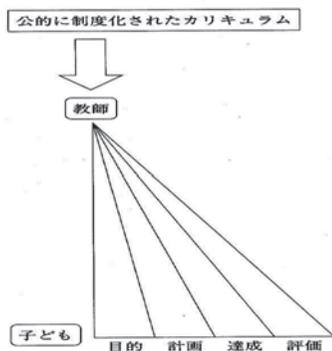


図1 従来の知識伝達型のカリキュラム

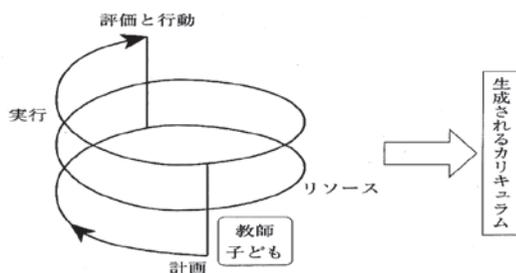


図2 SDGs学習に必要ならせん的なカリキュラム

いては、公的に制度化されたカリキュラム（学習指導要領）に従っている。これに対して、2002年度から公立学校に導入された総合学習や、ESDのようなグローバル課題の学習におけるカリキュラム観は、「上から計画され評価される」ものとしてではなく、「教師と児童生徒との関わりの中で生成されるもの」としてカリキュラムを捉えている。そして、その学習は図1のように直線的に進行するのではなく、図2のようにらせん的に進むものである。あるテーマについて学ぶ際に、あるときは教員が授業で知識を与え、また別の段階では生徒が調べ学習を行い、さらにワークショップで疑似体験をし、あるいは地域に出かけてフィールドワークを行う、というような学びである。それぞれがひとまとめの完結した学びであっても、全体としてはより高い目標に向かって徐々に近づいていく、というイメージである。らせん的なカリキュラムでSDGs学習を実践した事例については参考文献2を参照されたい。

3) SDGs 学習の特徴

それではSDGs学習に求められるらせん的な学びを行なうためには、どのようなことが求められるのであろうか。ここでは、参加型学習とワークショップ、社会に開かれた教育課程、カリキュラム・マネジメント、の3点を上げておきたい。

①参加型学習とワークショップ

SDGsの学習は、学習者自らが主体的に参加して自己変革を行うような学習活動である。そのためには知識伝達型ではなく参加型学習（アクティ

ブ・ラーニング）が有効である。参加型学習は地球の課題のように答えそのものが多様であり、答えを見いだすプロセスを重視する学習活動において重視される。

筆者が所属する（認定NPO）開発教育協会では、参加型のワークショップについてイギリスのグローバル教育の事例などに学びながら30年にわたって研究を進めてきた。そして、数多くの参加体験型学習の教材を製作してきた。とくに『ワークショップ版 世界がもし100人の村だったら』はESDの現場で盛んに活用されている。これは、SDGsの背景となっている文化的に多様で貧富の格差が大きい世界の現実を可視的に体験できる教材である。SDGs学習に役立つ参加体験型の教材集としては参考文献3があり、この中には17のテーマ学習のモデルカリキュラムが収録されている。

②社会に開かれた教育課程

ワークショップ型の参加型学習は、確かに知識のみならず態度やスキル獲得に有効な手法である。

しかしながら、あくまでそれは「擬似的な」体験にすぎない。ESDは子どもたちが将来、社会に参加するための教育でもあり、そのためには実際の社会との交流のなかで学びを深めることが大切である。

筆者らが関わった授業実践の経験から、参加型の授業は確かに知識や意識面で学習効果が一定程度みられるが、一段階上の学習に達するためにはフィールドワークなど実際社会との接触が必要で

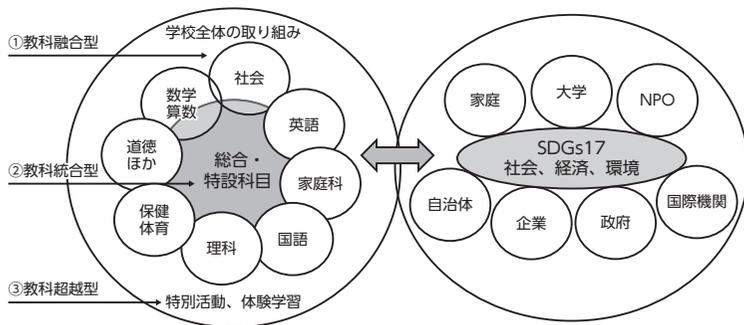


図3 社会に開かれた教育課程のイメージ
 出典：田中・奈須・藤原編(2019)『SDGsカリキュラムの創造』(学文社) p.57

あることがわかっている。図3のように地域、自治体、社会教育施設、企業、NPOなどと連携することで、SDGs学習の効果が上がり、生徒の社会参加意識が高まる。

③カリキュラム・マネジメント

SDGsの17目標は広範な課題を扱っていて、その教育も従来の教科の枠組みを超えている。SDGs学習の目的を達するためには、社会科、理科、家庭科などを中心としながらも、総合的な探究の時間や学校行事などとも連携して、最終目的であるところの「持続可能な社会の担い手」づくりを行うことが望ましい。SDGs学習全体を統括する教員（例えば、探究担当）がいて、公共、生物などの教科担当と連携するようなやり方が考えられる。ここでは、各教科・領域のSDGs関連の単元や学習活動を時間軸に沿って表示した「ESDカレンダー」（ネット上に多数の事例あり）の活用が有効である。

4) SDGs学習の第二步は？

それでは実際にSDGs学習はどのように進められるであろうか。おそらく多くはSDGsの17目標の学習から始めるであろう。SDGsの17目標について教師が解説したり、生徒が各自あるいはグループで調べて発表するというような学習のイメージである。ここまでは従来型の学習でも行われてきた手法である。それでは17目標を覚えたり、調べ学習をした子どもたちは、「持続可能な社会の創り手」となりえるであろうか。例え

ば、地球温暖化の解決に向けて積極的に取り組んだり、今回の新型コロナのような想定外の事態に対応できる人間になるであろうか。

SDGsの17目標を理解したり、調べて発表することは出発点として大切であり、図2のらせん的カリキュラムモデルでいえば、1周目2周目に相当する。それでは3周目4周目にはどのような学習を展開したらよいのであ

ろうか。打開するヒントとしては、先に述べた参加型学習、外部社会との連携、そしてカリキュラム・マネジメントがある。ここで大切なことはSDGs学習に向き合う教師の態度である。「世界にはこれだけ深刻な問題があります。将来を担う皆さんはこの問題解決に向けて取り組んで欲しい」ということを上から目線で言うことは禁物である。なぜなら地球温暖化や貧富の格差など「深刻な問題」を生み出したのは大人の世代であり、その解決を子どもである生徒たちに委ねるのはまさに「世代間の公正」に反することである。SDGsのような多様で複雑な課題の学習においては、生徒の学習の方が先行するような場面もあるであろう。教師ですら唯一絶対の解答をもちあわせてはいないのであるから、教師としてはSDGsの課題を生徒とともに学び、解決に向けて努力する姿勢を示すことこそが大切であろう。

[参考文献]

1. 西あい・湯本浩之（編）（2017）『グローバル時代の「開発」を考える－世界と関わり、共に生きるための7つのヒント』明石書店
2. 田中治彦（他編）（2019）『SDGsカリキュラムの創造－ESDから広がる持続可能な未来』学文社
3. 開発教育協会編（2021）『SDGs学習のつくり方－開発教育実践ハンドブックⅡ』開発教育協会